

取材／文◆杉山 春
(Haru Sugiyama)
写真◆上野好子
(Yoshiko Ueno)

日本 京都



最先端予防医学が生み出す 命の授業

エイズの予防研究からわかったこと

子どもたちの
意識変容のために

木原雅子

Masako Kihara

京都大学大学院医学研究科社会疫学分野准教授

一般財団法人日本こども財団理事長
国連合同エイズ計画共同センターセンター長

休み時間、床に寝そべるよにして過ごすやんちゃな男子高校生。その顔がプロジェクトが終わった時、柔らかな笑顔に変わっている。木原さんが小・中・高校生を対象に開発したWYSIHプロジェクトは、エイズ予防研究から生まれた、子どもたちに命の価値を伝える場だ。京都大学医学部の先端科学研究棟で「社会疫学」という手法を使って開発されている予防プロジェクトの原点に迫る。

WYSIH教育はいわば2階建ての教育で、自尊感の向上、人間関係の構築などの人間基礎教育の上に、各種の課題に対応する教育が乗る構造です。

MA どのように意識変容、行動変容を行うのですか。

木原 アンケートとインタビュー、徹底的な量的調査と質的調査を行います。調査した高校生は約30万人。性行動だけではなく、例えば携帯電話を何のために何時間使っているか、困っていること、大切なこと、友達関係、家族関係など、多方面について聞きます。その結果を土台に各種の科学的な理論を使って指導方法を開発し、実際に小・中・高で実施します。さらに、その効果評価を行い、効果のあった授業を事例として、全国の教員向け研修会や講演会で普及させるのです。

危ないセックスや喫煙、万引き、いじめなどをしている子どもたちには対症療法ではなく、その行動の背景にも関わらないと。

WYSIH教育はいわば2階建ての教育で、自尊感の向上、人間関係の構築などの人間基礎教育の上に、各種の課題に対応する教育が乗る構造です。

ト、Well-being of Youth in Social Happiness (若者の真の幸福)は、小・中・高の子どもたちに対するエイズの予防教育として始まったのですね。

木原 子どもたちの意識変容、行動変容を促すための指導法をソーシャルマーケティングの手法を使って研究開発しています。

例えば「守る」というテーマの授業なら、2階部分は「体を守る」ための性教育。無防備な性関係の危険性と同時に、他の高校生たちの本音を伝えます。1階部分は「大切なものを守る」として、将来の自分の役割に気付く場を提供し、自尊感の向上を目指します。こちらからは指示も禁止もせず、自分たちで考えてもらう。「エーッ、答えは言わないの?」と声が上がります。普段、子どもたちは指示さればかりの世界に生きていますが、自分で選ばないと。WYSH教育は精神的自立支援教育だといえます。

M A 日本の子どもは危機的状況にあるのですか。

木原 恵まれた生活を送っている10代もいますが、わずか15、16歳で人生の苦労のほとんどを経験している子どもが社会の隅に吹きだまっている。

平均すると、公立学校では2~3割の生徒が何らかの家庭の問題を抱えています。地域によっては6~7割を超えることもあります。メールやIT技術を使った表面的なやり取りは盛んですが、悩みや本音までは話しません。格差社会による家庭力の著しい低下、ITの普及によるリアルな人間関係の希薄化などをベースに子どもたちのリスク行動があるのだと考えています。

私たちの研究室には、途上国からの留学生が多いのですが、「日本はお金持ちで、子どもたちは幸せだと思われているのに」と言います。

M A 性に関する若者の変化は?

木原 調査を開始した2000年当時、若者の性行動は急激に活発化しました。全国どこでも同じですが、例えば東京都の高校3年生女子の性経験率は1984年の12・2ペーセントが、02年には45・6ペーセントに。初交年齢が早まり、性的パートナーの数が増え、性行動が多様化し、性関係に至る交際期間が短くなりました。先進国、途上国を含めこの

期間に日本ほど性行動が変化した国はありません。その後、徐々に沈静化。13年現在、若者の性行動は二極化しています。早期に性行動を開始する層は相手の数がさらに増え、一方、高校生全体の性経験率は低下傾向です。

M A こうした教育活動が、京都大学医学部の先端科学研究棟で行われていることに驚きました。

木原 社会疫学という分野です。日本で疫学(集団を対象とした医学的研究)の教室はありますが、社会疫学、中でもソシオ・エビデミオロジーを名乗っているのは、世界でも私たちだけです。統計的な量的研究と、インタビューを科学的に使う、質的研究を融合させています。例えば、患者さんが食事療法を守れない場合、医療関係者がそのニーズや価値観を理解することで、相手が変わることで、トップダウンで教えても変わりません。社会疫学は時代の要請だと思っています。

学生として教員、臨床医、遺伝子カウンセラー、看護師、政策ポイントを考える役人など多様な人が来ており、ニーズは増え続けています。

子ども時代 没頭する

M A どのような子ども時代でしたか。

木原 長崎県諫早市の出身で、父は銀行員、母は専業主婦でした。こだわりが強く、気に入ったことは夢中になるが、それ以外のことには興味が持てませんでした。学校ではほとんど話をしませんでした。通学には山を越えていくのですが、朝、少し乾いてチョコレートのようにすべすべになつた水たまりの表面に長靴でパンと下りるとそこに跡が付く。それに夢中になつて、いつも2、3時間目に登校していました。

今でいえば、発達障害の範疇だと思いますが、おらかに過ごしていました。先生は私が繰り返しが好きだと気付き、国語と算数のドリルをくださつた。1日何ページもやり、成績が追い付きました。そんな子ども時代のおかげで、気持ちを伝えにくく子どものことがわかるのだと思います。



(上)銀行員だった父に抱かれて、姉たち。
(下)オーストラリアの国立エイズ社会予防研究所所長、スザン・キバックス教授との出会いが新しい道を開いた



人生の苦労のほとんどを
経験している子どもが
社会の隅に吹きだまつていています。

MA 高校卒業後、長崎大学医学部を経て、研究者になるわけですね。

木原 結婚後、島根医科大学（当時）で、研究員として、遺伝的に高血圧になるラットを使った研究をしていました。妊娠後、大学から辞めるようになると、苦しかった。人付き合いが苦手で、研究で社会に貢献できると思っていたのに、道が断たれた。洗濯物を干しても、青空を見ても涙が出ました。夫はおむつ一枚替えず、夕食を食べたら、子どもがうるさいからと研究室に戻っていく。夫もまだ、人生を探していたのだと思います。今は“更生”して、協力的な人になりましたが（笑）。

夫婦関係は壊れかけ、私は自分を見つめたいと、前年、高血圧の研究で夫と一緒に行ったニュージーランドに子連れで赴きました。魅了されていた毛織物の機織りや、英語を学び、自分の甘さも知りました。やがて、夫がアメリカに留学することになり、子どもも連れてクリープランドクリニック付属研究所に2人で赴任しました。私は渡米前に京都大学で、あるホルモンを測定する特殊技術を学んでいました。当時は世界で京都大学だけが持っている技術でした。この技術で夫の研究を支えたのです。

ところが1年目に夫婦とも解雇されます。その技

木原 結婚後、島根医科大学（当時）で、研究員として、遺伝的に高血圧になるラットを使った研究をしていました。妊娠後、大学から辞めるようになると、苦しかった。人付き合いが苦手で、研究で社会に貢献できると思っていたのに、道が断たれた。洗濯物を干しても、青空を見ても涙が出ました。夫はおむつ一枚替えず、夕食を食べたら、子どもがうるさいからと研究室に戻っていく。夫もまだ、人生を探していたのだと思います。今は“更生”して、協力的な人になりましたが（笑）。

夫婦関係は壊れかけ、私は自分を見つめたいと、前年、高血圧の研究で夫と一緒に行ったニュージーランドに子連れで赴きました。魅了されていた毛織物の機織りや、英語を学び、自分の甘さも知りました。やがて、夫がアメリカに留学することになり、子どもも連れてクリープランドクリニック付属研究所に2人で赴任しました。私は渡米前に京都大学で、あるホルモンを測定する特殊技術を学んでいました。当時は世界で京都大学だけが持っている技術でした。この技術で夫の研究を支えたのです。

ところが1年目に夫婦とも解雇されます。その技

術を目的とは違う研究に使うように言われ、断つたのです。夫は再就職ましたが、私はできませんでした。そこで語学学校に通い、移民の妻たちと仲良くなりました。夫や子どもたちは仕事や学校で言葉を学びますが、妻はそうした場がありません。言葉ができないと、アメリカ社会から落ちこぼれてしまします。リビア、イラン、台湾、カンボジア、韓国、ベトナムの女性たちと一緒に英語を学び、それが母国の女性の立場について語り合いました。

アメリカから戻り、夫はいつたん厚生労働省の役人になり、その後あるがんセンターに就職しました。私は夫に誘われ、当時最先端技術だったDNAの研究に従事しました。さらに、エイズの予防研究をしないかと声が掛かりました。そのころ同性間感染によるエイズが増え、国は対応を迫られていましたが、やる人がいない。私たちのように遅く出発した研究者でも勝負できるかもしれないと参加しました。私は夫に説得され、頭が割れそうでした。

日本人の性行動の予備研究を始めたのは97年です。背景にはビル解禁があります。コンドームの利用が減って、エイズが増えるのではと厚生労働省は懸念していました。

私はラボの研究者で、紙と鉛筆のアンケート調査は信用していませんでした。でもやる人がいない。シカゴ大学の調査専門機関に教えを請い、アンケートを作りました。

出会いの中から

MA この時、医学と社会学が出会ったのですね。

木原 そのころ、オーストラリアから、社会学者として性行動調査を担当したスザン・キパックス先生が日本に来られました。国立エイズ社会予防研究



生徒の中に入って熱意を込めて語る木原さんの授業。各学校の特色に合わせて選ぶ言葉、使う教材の全てが吟味されている



夫の木村正博さんと同じ研究室で教える。研究室に来る留学生は、途上国出身者が多い

所の所長です。同性間の感染者が非常に多い国ですが、予防に成功していました。私はお世話係をしました。

オーストラリアも男性至上主義で、女性の研究者は男性の2、3倍業績を上げないと認められない。私は今59歳で准教授ですが、彼女も長年准教授で、定年間際によく教員になりました。

先生は講演ではあらかじめ原稿を作り、読み上げました。しかも手が震えている。自國での研究発表の場で何度も男性研究者に足を引っ張られた。その体験がPTSDのように襲う。それで、原稿以外のこととは話さないと決めたということでした。それで後進に道を開くためにも研究は諦めないのでした。その後アンケート用紙を作る時には、貴重なアドバイスを頂きました。それから数年後、先生の研究室に短期留学させていただきました。安定した研究職のポストがなく、子育ても中途半端で、私は挫折感を味わっていました。留学当時は先生の研究室で研究さんまい、そして先生の人生についてのお話を伺い、励まされました。

MA そして、WYSHを開発するのですね。

木原 その後、やっと声のかかった長崎大学に単身赴任し、研究者としての生き残りをかけて最後の挑戦をしようと決めました。駄目なら仕事も家族も捨てつもりでした。現場の教員の話を聞き歩き、教育委員会からは何度も門前払いを受け、それでも日参して最終的に高校生調査にこぎ付けました。その膨大な調査結果からは、日本社会のひずみを背景とした子どもたちの危機的状況、声なき叫びが大音響のように聞こえてくるようでした。現状分析と評論にとどまっている場合ではない、すぐに何かをしなければと、02年に教育の開発を始めたのがWYSHです。活動が評価され、06年に国連合同エイズ計画

共同センターが京都大学大学院に設置され、センター長になりました。WYSH教育は04年に厚生労働省、07年に文部科学省の公的事業になりました。そこの財団を設立、代理理事になりました。そ

べっていたやんちゃな男子高校生が終了時には穏やかな笑顔に変わっていました。

木原 これまでWYSH教育を受けた生徒は20万人を超えます。一校のモデル授業の開発には数ヶ月かけ、授業は真剣勝負で臨みます。現場から離れないことが大前提。子どもに全力で寄り添い、夢や希望を育めるよう支援します。不登校気味だった中3の女子がWYSHの授業を受け、学校に通い始め、今は看護師になり、「凍として生きる」という言葉を忘れませんという年賀状を毎年くれます。「子どもの輝く笑顔が嬉しくてWYSH教育を続けています」と先生方は言います。

無口で、不器用な私が、WYSHの活動でやつと周囲とつながれた。命が尽きる瞬間まで、この活動を続けたいと、熱い夢を持つています。

Masako Kihara

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野准教授。

54年長崎県諫早市生まれ。長崎大学卒。医学博士。79年から日本とアメリカで循環器疾患の基礎研究に従事した後、92年に神奈川県立がんセンター臨床研究所で発がんの分子疫学的研究に従事、肺がんの遺伝素因の研究で博士号取得。94年よりエイズの疫学研究に参加。行動疫学研究や社会疫学的手法により予防研究を担当。現在国連合同エイズ計画共同センター長、一般財団法人日本こども財団理事長、全国高等学校PTA連合健全育成委員会協力委員長。著書に『10代の性行動と日本社会——そしてWYSH教育の視点』(ミネルヴァ書房)、『WYSH教育事例集1』(近刊)など。